

幸運な時期に邂逅

大橋, 正叔
天理大学

<https://doi.org/10.15017/7363937>

出版情報 : 雅俗. 22, pp.129-130, 2023-07-15. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



幸運な時期に邂逅

大橋 正叔

◎プロフィール

●生年月日 昭和十八年十一月十六日
●卒論題目 「近松心中浄瑠璃——戯曲性と局面展開——」

●デビュー論文 「太平記読みと近世初期文芸について——『太平記』の享受から——」。正直なところ、信多純一先生のもとで近松では修士論文は書けなかったもので、心機一転して三年目に提出した論文のまとめ。

●思い出の研究書(論文) 和辻哲郎『日本芸術史研究 歌舞伎と操り浄瑠璃』。初めて通読した大著の研究書。国文学者・演劇研究者とは異なる視点による歌舞伎・浄瑠璃の分析に魅せられた。
●研究以外の趣味 この年になると特になし。

「私の研究履歴」をとの依頼を受けはしたものの、書くとなると特別なことはなく、某氏の迷言「自分を解説するほど恥ずかしいことはない」が浮かび、後悔している。

大学は教員養成大学の中学国語課程、家業を継ぐつもりでいたため、特に教員になる熱意もなく、高校から続く体育系クラブ活動に四年間を過ごした。卒業論文は横山正教授のもとで論文とは名目だけの近松門左衛門の世話を論述して提出。大学院へは山根賢吉先生の勧めがあり、近世文学をとの思いはあったが、研究する対象も曖昧のまま、大阪大学大学院文学研究科修士課程国文学専攻を受験し、昭和四十三年四月に進学する。

そんな私が近世文学研究に目標を定めたのは、演劇研究会の会員となってからである。昭和四十四年春に入会している。その年の年間研究テーマは、「関西における近松研究の歴

史」であった。近松研究の先達(藤井乙男・石割松太郎、木谷蓬吟)の一人藤井乙男(紫影)博士を、新人がよいとのことで、私の担当となる。石割松太郎、木谷蓬吟の担当は松平進、向井芳樹の既に学会で活躍されているお二人である。私には重荷であり緊張する課題であった。当時の調査ノート・収集資料を今も手元に保存しているが、改めて見て精一杯努めたことを思い出す。ただ、その発表は、藤井博士の著書『近松門左衛門』(明治37・9)、『江戸文学研究』(大正10・5)、『江戸文学叢説』(昭和6・9)、『史話俳談』(昭和18・2)等について、概説しただけにとどまる(藤井乙男研究史『演劇研究会 会報八号』昭和44年12月)。私としては、藤井博士から近松門左衛門についてだけでなく、近世文学自体の豊かさと共に近世文学への視野や作者や作品に向かい合う態度についても教示を受けたつも

りであったが、その時に受けた感銘をどこまで維持し得たか、省みて忸怩たる思いである。演劇研究会は、私の研究履歴の出発の場であり、会自体一時中断という時期もあったが、五十年に亘る今日も一会員として多くのことを学び得る場となっている。

修士三年で修士論文を提出。近松では書けず、藤井博士の著書に惹かれ、ジャンル、人物に関わらず演劇も絡め幅広い視点から近世初期の文学を考えたいと、『太平記』を軸に『太平記読みと近世初期文芸について』『太平記』の享受から——と題することとした。『太平記』を挙げたのは、その享受の様相が種々のジャンルに亘っていることを後藤丹治先生の著書から学んだことが大きい。論文審査に研究室の先生方以外に中世史の黒田俊雄教授が居られたのには恐縮したが、無事修士課程を修了することができた。修了と同時に、私は転出された国文学研究室助手の後任となる。急な話であったので助手の任に着くことは、家業のこともあり、戸惑う転身であった。修論は『待兼山論集文学編 第五号』（昭和47年3月）に活字化され、論文第一号となり、ともかく進むべき道は決まる。

昭和四十八年に、少し以前から大谷篤蔵先生や日野龍夫、井口洋、上野洋三さんたちがされていた読書会が、九州大学から関西大学へ転出された中村幸彦先生の大阪大学への出講を機に、会場を大阪大学助教教授信多純一研究室に移されたことにより、私も参加することとなる。名称も読酒会（洒落本を読む会）とし、メンバーに肥田皓三、水田紀久さんも加わり、名古屋から延広真治さん、広島から横山邦治さんもと、部屋は一杯である。洒落本（上方・江戸）・黄表紙・狂詩・江戸座等一書読了するごとに次回の作品を決め、当番もなくこれといった目標もなく、読むことを楽しむ会であった。会後の直会も賑やかであった。信多研究室での読酒会は昭和四四年頃まで続き会場は移る。私は昭和四九年四月に大阪樟蔭女子大学に、昭和五一年四月に天理大学に転出するが、読酒会には昭和六十年頃まで参加していた（昭和六十一年七月胃癌を手術）。その後の会の移り変わりはよく知らないが、その流れは今も続いている。ただ、読酒会で得た諸先生との交流は続き、また、学んだことは研究への示唆を与える基盤となっている。

天理大学へは祐田善雄先生の後任人事であった。縁からして浄瑠璃研究を続けるつもりでいた。一年後に天理図書館二階に個人研究室を許され、書庫内の閲覧も記帳すればでき、書庫の散策で近世文学関係書の配架の位置を覚えるのは楽しみでさえあった。当時の天理図書館普通本書庫には貴重書以外の和本等も配置されており、藤井紫影・高野辰之旧蔵等の山のような浄瑠璃本を含め近世文学関係図書も書架に並んでいた。浄瑠璃本の同版・異版・覆刻等を目前に並べることができた。また、同じ階にあった天理図書館善本叢書編集室へは、編集業務等のために週二日登館される木村三四吾先生を訪ねていた。先生の机上には編集用に持ち出された貴重書が置かれており、先生は、それらの本について、私に「どういう本ですか」「この本（写本）はいつ頃に書かれたのですか」等質問することによって、本の見るべき要点をそれとなく教えてくださったが、付け焼刃の返答では身に着くには至らなかった。編集室の入口には狩野君山先生の「実事求是」の額を掲げられ、「本は嘘をつかない」が先生の口癖であった。また、先生は、「一つのがきちんと身

に着けば一人前、それに加えて何かがあれば御の字」といわれ、自分の専門分野を確立することを説かれた。天理図書館の豊富な蔵書に移りせずに、自分の研究課題を深めるようにと諭されたこと知り、近松研究、浄瑠璃本研究を主とすることに努めた。図書館内の個人研究室は十年余の期間であったが、館員の人たちだけでなく、訪書に来館された専門を同じくする方や分野の異なる方とも接する機会が持て、専門に閉籠ることなく学べたのはありがたいことであった。

善本叢書の完成後も木村先生は天理図書館に嘱託として来られていた。その日に合わせて昭和五八年頃から私の研究室で石川真弘氏と三人で俳書を読む会を始める。会は木村先生が大阪樟蔭女子大学を定年退職され、生駒市立図書館長をされていた間や、平成五年に先生が病に倒れられた時期には休会したが、自宅療養を続けられるようになって、ご自宅でも週に一回行うこととし、平成二十年四月九日に先生がご逝去される直前まで続く。俳書は『竹馬狂吟集』・『犬つくば』から始まり、貞門、談林、西鶴、芭蕉、蕪村、几董等、綿屋文庫の俳書から連句を選び読み進めていっ

た。天理図書館の河合忠信、金子和正、大内田貞郎、牛見正和が加わり、さらに途中から、野村貴次先生、浅見美智子さん、榎坂浩尚先生も出席され、大谷篤藏先生や雲英末雄さんが飛入りで参加された。俳諧について多くを学ぶが、流派の違いや句法について私は皆さんのご意見を拝聴するのみであった。

また、中村幸彦先生から昭和六十年八月九日付封書が届き、『角川古語大辞典』の統合のメンバーに加わるようにとの誘いを受ける。統合の任は、月二回京都の角川事務所に出かけ、いろんな分野の方に割り当てられた語彙の提出原稿を、上代・中古・中世。近世・国語学専攻の編集者が組になり、原稿を吟味し、不足を補うべく時代別に宿題として持ち帰り、訂正・補筆して出す、との説明も記されている。以前から下請けの担当語彙の原稿を提出していたのでお受けし、早速九月十五日から参加することとなる。統合では辞典の立項目とするにはまともらず宿題として持ち帰るのも多かった。一語の語意を汲み取ることが容易でないことを知り、俳諧での学びと共にことばそのものへの関心を持つこととなる。統合のため京都事務所がよく一緒になる近世文

学関係の方は、中村幸彦、土田衛、浜田啓介、長友千代治、高橋喜一、延広真治、日野龍夫の諸先生であった。他の分野にあっても名前の知った先生方が参加されており、先生方との会話は新鮮で新たに学ぶ場所を得た気分であった。第五卷（平成11年3月刊）の刊行までこの仕事は続く。

以上は研究を続けるについて基礎となった履歴であるが、これとは別に私たちの世代は国文学研究を進めるに幸運な時期に邂逅している。昭和二十六年十二月に日本近世文学会が設立されるが、その後の昭和四十年前半までを国文学研究復興の第一期とすれば、私の三十代から五十代前半、昭和四十八年頃から平成十年前後にかけては復興第二期に当たる。昭和四十七年には国文学研究資料館も創設されている。国文学関係の出版企画（個人全集・古典文学全集・叢書・叢刊・集成・辞典・事典・講座等）や共同研究・調査・作業、展覧会等が盛かに実施された時で、若い私（当時）にも専攻分野に関連する執筆依頼や共同研究・調査・作業への誘いが切れることになった恵まれた時期であった。受けた課題について執筆に励むこと自体が研究でもあり、

また同時に、これらの仕事を通じて得た多くの方々との交流は後まで続き、いろいろな場面においてご示教を得ることができた。

右は私の研究環境を記したのであるが、それはそのまま私の研究履歴でもある。現在の窮屈な状況からは贅沢な話と聞かれよう。今や大学は、平成三年七月の大学設置基準大綱化以後、自己点検評価を迫られ、また、グローバル化の波に対応すべく大学改革へ走り、多忙さは増す。さらに平成二十年前後からは十八歳人口の減少による入学定員確保への対策をと厳しい現状に置かれる。近年ではさらに科研費申請への叱咤やコロナ禍による負担が加わる。院生とつても研究職への道は国文学科の縮小や年期制を敷くなど狭くなっている。近年の研究実績は、多くはこのような窮屈な環境の下で労作されているのが現実であろう。この状況を承知しながら敢えて私の成行きを記したのは、多くの方々に接し学び得たことが、私を畏縮させるのではなく私への励ましであり楽しみであったと言えるからである。この経験から、学閥や学風に関係なく、研鑽の場として既に随所でなされている学会・研究会等を積極的に活用され、幅広い研究環境

を自ら確保されることが、厳しい現状の中で研究の継続を導いてくれる最善の味方でないかと、私は思っている。